

『実需者提携米通信』No.1号

1. はじめに

昨年秋の度重なる台風被害を乗り越え、令和2年産米の栽培が始まりました。従来、米の消費においては中食・外食等の業務用米の占める割合が年々伸びていましたが、新型コロナウイルスによる外出自粛の影響により、業務用米の消費減退が懸念されることから、まずは収穫の秋に向けて、10a 当たりの収入確保のため収量が少しでもアップ出来るよう例年以上に、各品種の特性を考慮した肥培管理に取り組みましょう。

2. 2年産に向けた実需者提携米栽培管理のポイント

元年産は7月の低温・日照不足と8月からの異常高温、更には度重なる台風被害により、実需者提携米の収量・品質確保に苦慮した年でした。さらに収穫後の秋から春先まで降雨が多く、稲わらの鋤き込み等の土づくりにも難がありました。

今回は、各品種の品質と収量確保を第一優先に考えた多収に向けた栽培管理のポイントについて掲載いたします。

(1) 多収に向けた栽培管理のポイントと各品種の栽培上の注意点

- ア. 目標穂数を早期に確保するために、極端な疎植は避け、最低でも50株/坪(15株/m²)以上で植え付けましょう。
- イ. 地力を加味した上で、窒素量10kg/10aを施用し、肥切れを防ぎましょう。
- ウ. 生育期間および登熟期間中に葉色の低下が見受けられる場合は、追肥の施用も行いましょう。

○ちほみのり（早生）

早生品種で生育期間が短いため、登熟期間の確保を目的に、早期に植え付けましょう（5月上旬まで）。【**早期移植**】

○萌えみのり（中生）

「葉いもち」に対して「やや弱い」ため、発生が懸念される圃場では箱施薬剤や本田防除を行いましょう。【**いもち病対策**】

○とよめき（晩生）

4-HPPD 阻害剤除草剤成分（ベンゾビシロン、テフルトリオン、メトリオン）に感受性が高いため、これらを含む除草剤の使用は避けましょう。【**除草剤の選定**】

○あきだわら（極晩生）

出穂期が遅いため、広域防除のタイミングがずれることから、斑点米カメムシ類を個人防除で計画的に行いましょう。【斑点米カメムシ類対策】

※別紙「実需者提携米栽培管理チェックリスト」を活用しましょう！

(2) 2年産に向けた栽培管理のポイント（共通）

ア. 「還元障害（ガス沸き）」対策

前述のとおり、降雨が多かったことで稲わらの腐熟が不十分である可能性があります。分げつ期（5～6月）が高温に推移すると土壌の還元が進み、鋤き込んだ稲わらの急激な分解がおこり、活着遅れや分げつ抑制などの還元障害（ガス沸き）が発生します。発生が懸念される圃場では浅水管理を行い、障害対策を実施しましょう。

イ. 「スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）」対策

この冬は平均気温が8.7℃と過去10年と比較しても最も高かったため、越冬のスクミリンゴガイが多発生となる可能性があります。

昨年作でスクミリンゴガイの発生が確認されている地域では、被害防止のため、早めの防除対策を行いましょう。

ウ. 「暑さ」対策

近年の高温に負けない稲づくりに向けて、「中干し」と「穂肥の適正施用」を行いましょう。「中干し」には、地中深く根を張らせる効果があるため、登熟期の高温障害の予防として有効です。また、高温時に出穂期の葉色が低下しすぎると登熟障害を助長するため、出穂期の栄養状態を保つために「追肥の施用」も視野に入れましょう。

エ. 「紋枯病」対策

「紋枯病」は、気温が高いと発生しやすくなるため、近年、多発圃場が多く見受けられます。箱施薬剤や本田防除で計画的な防除を行いましょう。

以上